

全学フォーラム：奈良女子大学における教養教育の再構築のために 第2回の報告

文学部・保田卓先生

教養教育改革に向けて学生の履修状況を分析しました。現状を共有することで、具体的に議論していければ、と考えています。なお、詳細な分析結果を示す資料を教育システム研究開発センターのHPに掲載しておりますので、併せてご覧ください。まず、「学科（コース）別科目群別平均履修単位数」は、全体を通じて総計が154.9～189.1、教職と放送大学・キャリアプラン・資格関連の科目を除いても137.8～160.1となっており、要卒の124や全国調査での4回生前期までの平均取得数120.5（ベネッセ『第2回大学生の学習・生活実態調査』2012年11月実施）と比べてかなり多くなっています。学科（コース）別にみると、文学部言語文化学科日本アジア言語文化学コース（以下「日ア」）では外国語や教養が6学科・コース中で多め、同人間科学科教育学・人間学コース（「教育」）では教職が最多、理学部数学科（「数学」）では主題・教養が最多、同化学科（「化学」）では専門が多く教職は少なめ、生活環境学部食物栄養学科（「食物」）では専門が最多で教養が少なめ、同生活文化学科では教養が多め

で教職が少なめとなっています。

次に「履修の典型例」ですが、各学生について各科目群での取得単位数と各学科（コース）の平均取得単位数との差の絶対値の総和を算出し、その値が最小となる学生をさしあたり機械的に典型例と見なしました。日アで外国語の履修が多いのは第三、第四外国語の履修者が多いことも大きな要因となっているようです。また教育と（あるいは文学部全体に？）共通する特徴として、4回生でも卒論関連以外の専門科目を一定程度履修していることが挙げられます。化学では、1回生で履修する専門科目数が比較的多い一方、数学や生活環境学部とも共通して、4回生では卒研関連以外の履修科目が日ア・教育と比べて少なくなっております。文学部や数学より必修科目が相対的に多いのも特徴です。食物で際立っているのは、学科での必修・選択必修に加えて管理栄養士などの資格関連の必修科目の多さです。そのためか、主題・教養の履修は1回生時にしか見られません。

表1 学科（コース）別科目群別平均履修単位数

主題	外国語 (日本語を含む)	保健体育	情報処理	教養科目群*1	専門科目	教職	その他 (要卒外)*2	総計	要卒計	
(18)										
日ア	8.9	21.3 (16)	2.6 (2)	2.5	21.0 (12)	100.4 (60)	25.9	6.5	189.1	156.8
教育	8.4	17.5 (16)	2.4 (2)	2.2	16.2 (12)	105.5 (60)	30.5	2.5	185.2	152.2
数学	11.4	9.7 (8)	2.9 (2)	3.2	30.3 (12)	88.1 (60)	27.3	4.9	177.9	145.6
化学	7.3	8.6 (8)	2.5 (2)	2.9	15.0 (12)	110.4 (77)	12.5	0.2	159.5	146.8
食物	6.0	12.3 (12)	2.1 (2)	2.0	9.8 (12)	127.9 (74)	16.3	3.8	180.1	160.1
生活文化	8.1	13.4 (12)	2.2 (2)	2.8	25.5 (16)	85.7 (68)	14.5	2.5	154.9	137.8

※()内は要卒単位数

*1 食物の教養科目群不足者は基礎科目群および「現代社会と職業」から充当

*2 放送大学・キャリアプラン・資格関連

表4 履修の典型例（生活環境学部食物栄養学科）

1回生	2回生	3回生	4回生
日本国憲法(B) いのちと健康 委員のくらしと文化 一般基礎英語(B) 一般基礎英語(C1) 実践基礎英語(C2) 基礎基礎英語(C3) ドイツ語ⅠA(13) ドイツ語ⅠA(14) ドイツ語ⅠB(13) ドイツ語ⅠB(14) 健康運動実習Ⅰ(K) 健康運動実習Ⅱ(K) 情報処理入門Ⅰ(H) 現代法概論 英語の中の物理学 健康・スポーツ科学 キャリアデザイン・セミナーB(11) 教職論(A) 生活環境学原論 食物科学概論 調理学実習(D) 応用調理学実習(D) 住環境学概論 環境と健康 公衆衛生学 生活福祉論 栄養学概論 生化学Ⅰ 生化学Ⅱ 有機化学Ⅰ 有機化学Ⅱ 基礎化学実習	エクスタンプ・リアリティ(英語)(3) 外国語コミュニケーション(英語)(8) 教育原理(A) 教育心理学(B) 教育課程論(A) 特別活動論(A) 教育方法の理論と実践 生徒指導・進路指導論(A) 教育相談(B) 病理内科学 微生物学 細胞生理学 食品化学概論 食品化学各論 調理科学 食品微生物学 食安全学 食品衛生学 基礎栄養学実験 応用栄養学 基礎栄養学実習 基礎栄養学特別講義Ⅰ 栄養教諭論 食に関する指導論	栄養教育実習 事前・事後指導(栄養教育実習) 分子病理学 病態生理・生化学実験 食品加工学実習 食品化学実験 食品微生物学実験 食安全学実験 応用栄養学Ⅱ 臨床栄養学Ⅰ 栄養教育論Ⅲ 栄養教育論実習 臨床栄養学総論 臨床栄養学Ⅰ 臨床栄養学Ⅱ 臨床栄養学Ⅲ 臨床栄養学実習 給食経営管理Ⅰ 給食経営管理Ⅱ 給食経営管理実習 臨床栄養学臨地実習 公衆衛生学臨地実習 給食経営管理臨地実習 食品貯蔵学 基礎栄養学特別講義Ⅱ 産物栄養学研究法	エクスタンプ・リアリティ(英語)(11) 外国語コミュニケーション(英語)(10) 総合演習(J)【食物と環境】 栄養学総合演習 卒業研究Ⅰ 卒業研究Ⅱ
凡例 科目群表示 基礎科目群(外国語を除く) 教養科目群 基礎科目群 カリヤプラン・資格関連科目群 専門科目 必修・選択必修表示 ● 必修 ● 選択必修 ● 管理栄養士必修 ● 食品衛生管理者養成課程及び食品衛生監視員養成課程 必修または選択必修			

NEWSLETTER30の第1回フォーラムの報告中、理学部の渡邊利雄先生のご所属が生活環境学部と誤記されていました。お詫びして訂正いたします。

理学部・棚瀬知明先生

■ 「知の創造」と「知の継承」の場としての大学

「知の創造」と「知の継承」の二つが、車の両輪のようになって初めて、大学という教育機関で人を育てる意味があると考えています。たとえ奈良女子大学という小さな大学であっても、この二つは常に組み合わせられてほしいと思います。知の創造であれば、民間企業や国の機関の研究所でいいし、また、知の継承であればカルチャースクールや大学予備校がある。知の創造と継承のベースには、自由な意志とアカデミズム的な民主主義があり、それが大学のすべてだと思ふのです。政府は、グローバル人材の育成とか、理系重視とか、先端の学問とか、力んだことをいいますが、それで本当に人が育つのかなという疑問ももっています。このフォーラムでは、教養教育を改善するとともに、将来を見据えて、奈良女がどういう大学として生き延びていくのかが模索されているのだらうと感じています。法人化以降、中期目標・中期計画が6年で区切られていますが、いいものが継続されていくためには、10年先まで考えないといけないと思います。

■ 理系の学び

昨今の高校生は受験でいい大学に行くために、選択科目だけを集中して勉強する傾向にあります。理系では、化学を選択する学生は多いですが、物理と生物、地学まで含めて勉強する学生は皆無と聞いていいでしょう。化学と物理か生物かを選ぶのが主流です。化学科の学生の場合、化学一本に集中しているために、もう一つはあまり勉強していない学生が多く見られます。化学も完成度はそう高くないので、大学に入ってから、化学の基礎教育を「専門必修科目」と称して積み上げていくことになります。懇切丁寧で学生にとっては親切的な教育カリキュラムになっていると思います。このおかげで、卒業時には高度なところまで化学の勉強が積み上がっていくのですが、それだけでは、幅広い理系人材としての育成はできていません。かといって、高校生に「選択科目だけでなく、全部勉強しろ」といってもだめですね。今の高校には商業ベースの効率主義的な考えが入りすぎています。

■ 専門重視が生み出す「壁」

大学でも、「大綱化」で1回生から専門科目が始まることになりました。それによって、大学における基礎教育・共通教育が失われてしまったと思います。共通教育という土壌がないので、学びの木は化学だけを肥料として、ただ上に伸びていくことしかできない。学年が進んでも化学しか知らないから、行こうと思っている領域に興味があっても進めない、ということになります。

本学の化学科を出て化学のプロになる人は、ほぼ皆無です。多くは、自動車会社にしる、電気メーカーにしる、さまざまな他の学問要素を取り入れないと伸びていけないところに就職します。研究でも、花が咲くのは学際領域においてです。例えば、発見した化合物に物理の人が興味をもったとしても、奈良女の学生は高校で物理を勉

強していませんから、他分野の人と話をすることができない。いい研究をすればするほど、最後に乗り越えられない壁に行き着いてしまうというのが、私が感じている奈良女生の一番の問題点です。他の大学でも同じではないでしょうか。

理系の学生のカリキュラムの履修状況を見ると、2年から3年に進むにつれて、専門科目一色になります。専門の基礎になるものが必修科目の大半を占めているために、専門科目が肥大しているのです。このように専門という垣根で学生を囲い込むことを放棄して、理系の基礎教育までも教養教育の中で教えていくのが大学教育の本来のあり方ではないかと考えています。

■ 6年一貫教育

奈良女の理系では、学部は学問の基礎教育でいいと思っています。大きな意味で、教養教育が学部全体を支配していく。最初に車の両輪の話をしました。これは学部と大学院をワンセットにした考えです。理系は修士2回までを6年一貫にして、前半3年間を教養教育に、後半3年間を研究も含んだ専門教育にする。そうすれば、大学院では、答えのないものに取り組む研究を通して、知だけではなく、生き方や人との関係など、人間としての育成に関わる重要なものを学ぶことができるでしょう。

この場合、教養教育の中で理系の教育カリキュラムをシステムティックに組み立てる必要があります。専門カリキュラムとして各学科内に閉じている科目を、共通教育としてオープンにするのです。日本全国の大学で、このような試みが必要ではないかと思っています。

■ 「学び直し」ができる大学

現在の大学の問題は、学び直しができない点にあります。化学に来てしまったら、物理を勉強できるところが無い。さらには、文系に入学してから理系に変えたいという場合、今の日本では大学をやめて受験し直さないとイケない。なぜ、こんなペナルティを負わされなくてはいけなのか。若い学生は、人生にやり直しはきかないと思っているので、再受験といった大きな選択ができない。自分の枠を広げたいということが自然にできるような教養教育、基礎教育があれば、大学の中で学び直しができる。専門までつながる基礎教育が大学にあれば、大学院レベルでは文系から理系、もしくは理系から文系への変更は確実にできます。

■ 専門の基礎的な部分を教養教育に再構成する

難しいようですが、専門科目には基礎的な部分が必ずありますから、それをオープンにする意識があれば、本質的な変更がなくても実現可能です。基礎教育のプログラムがしっかりしていれば、おそらく奈良女に閉じない、普遍的にいいものができるでしょう。そうすることで、奈良女の学生だけではなく、他大学の学生や、中学・高校の先生の学び直しにも開いていける。そして、奈良女の新しい教養教育が他大学と連携したり、その連携が地域に広がっていくことになれば、日本の大学もよくなると思います。現状からあまりにかけ離れているかもしれ

ませんが、私の考えを述べさせていただきました。これを機会に、長期を見据えて、その仕組みが長く通用する、いいものをぜひお考えいただきたいです。

生活環境学部・久保博子先生

■ 生活環境学・家政学という学問領域のまなび

□ 「境界領域」における学び

生活環境学部・家政学は複合領域に分類され、学際的です。家政学は、学会のwebにもあるように家庭・福祉、技術・産業、情報・環境、文化・芸術といった領域に、文系から理系まで広がっています。私の専門はこの中でも人間工学の分野で、これも学会webにあるように生理学から始まり、物理学、工学、管理運用まで広がっており、ある程度基礎から応用まで教えています。境界領域にありますので、「理系だ」「文系だ」といわれると違和感を覚えてしまいます。私の学問領域である生活の中で考えると、これは理系だから文系だからと切り分けて、片方を知らないというのは変な話です。他学科・他学部授業を開くというお話がありましたが、基礎科目として、その専門の先生方の授業を受けられますので賛成です。

■ 現状の生活環境学部のカリキュラム

□ 自由度はあるのか？

例として生活環境学部の生活健康学専攻の前期のカリキュラムを示します。資格関係では、教職の家庭科、保健、保健体育と、健康運動指導士の受験資格に合わせた科目があります。専門科目とオーバーラップするようになってあるので、これをとると専門科目にもカウントされます。私たちのコースでは、1回生で教養科目を全部取るよう指導しています。1回生でちゃんと取っておかないと首が回らなくなるから、覚悟せよと。ただ、1回生でとれる教養科目は限られています。空きコマはこの時間割上では殆どありません。私も学部生の時、開講科目一覧を見て、奈良女には取れる教養科目が少なくこれだけなのかと思いました。さらにその中でも、1回生で取るには、時間的余裕がなくて、とりたいた授業を受けられません。上回生で取れるかという、2回生になると専門科目と実習が山ほど入ってくる。3回生は毎週レポート提出がある実習もあれば、夜中までプレゼンの練習をしなくてはならない実習もあります。時間割は空いているように見えても、忙しいです。4回生では、1～3回生の授業を基礎として一から実験手法を教えます。研究によっては「毎日、実験で朝9時～5時まで帰れないよ」というところもある。やっぱり取れないのです。

□ 学生の意見と学生の様子

「とれる資格を全部とっちゃえ」と1、2回生を唆すのですが、ご覧のようなカリキュラムになっているわけです。資格を目指す、時間割が目一杯に詰まっています。1回生はがんばるんですが、2回、3回生になるとギブアップする学生が多い。教職科目をやめてしまうことが多いようです。しかし、教職科目がないと、今度は時間割がスカスカになるんですね。学校に来なくな

る学生は、アルバイトとサークルと就職活動に精を出す。すると、3回生のゼミ配属が決まった後で、あれもこれも勉強しておけばよかったと後悔することになる。その時点では、もう+αの単位をとる余裕はありません。それでもダブルスクールをしている学生、4年で卒業して就職しなくちゃと思っている学生が多い。

でも奈良女生は色々なことに興味を持って真面目に取り組んでいます。個別に話を聞いてみると「勉強も研究も楽しい。余裕があったら院に行きたい」というんですよ。彼女たちは欲張りなんだと思います。サークル活動もアルバイトもして、授業もきっちりとりたいた。資格もとりたいた。何でもかんでもやっている。日本社会全体にそのような傾向があると思います。

非常にまじめな学生たちですので、先生のいうことはきっちりやるんですが、意見を聞いてもいわない。好きなことをやれといわれても、何が好きなんだろうという顔をしている。ですが、土俵を作って一から考えさせると、よく考えます。やるとできるのですが、手間がかかるというのが本当のところですよ。

□ 授業を開放したくてもできない実情

他学科・他学部授業を開くというお話がありましたが、資格関係の授業や、人数制限がある実験については、外から受け入れるのは難しいというのが本当のところですよ。また、食物栄養学科は、資格試験のためのさまざまな制約があります。授業を開放したくても、厚生労働省で何人までの授業と決まっているので、他学科からの学生を受け入れることができない。「これは、食物のあの先生の授業を聞いた方がいいのに」と思っても、できないのが実情です。

□ 生活者の基礎科目としての教養教育

生活環境学系の科目を基礎科目として開放することに関しては、生活していく上で重要なことなので、全学の学生にとらせたい。教養の授業を受け持っていて「そんな基本的なことも知らないのか」と思うような、すさまじい生活をしている学生もいるからです。文学部・理学部どころではなく、基礎を高校までほとんど勉強していません。該当する教科が高校まで家庭科しか有りませんから、大学とはかなり異なります。幸いにも奈良女には衣食住と家族が揃っています。生活環境学分野のまとまった基礎教育ができる場所であるのに、そういう授業をしないのは片手落ちだと毎日頃から思っています。ただ、これ以上授業が増えるのは嫌だというホンネのところもあって、「みなさんで教養の授業もやりましょう」といわずに済ませているのが現状です。私個人としては、すべての学部の授業で相互乗り入れができれば、と思っ

議論

■ 理学部・渡邊利雄先生

専門教育の役に立つのが教養教育だというわけではありません。世の中に溢れる不思議なことを、知りたいという気持ちを育むのが教養教育だと思っています。

■ 生活環境学部・植野洋志先生

学生は、授業に出ないと単位をもらえないという、脅迫的な気持ちで出てくるけど、勉強はしていない。教養は、面白いことがたくさんあることを指し示す科目であっていいと思います。まずは、興味をもつことを教えるべきだと。それがないと人は勉強しないと思います。

■ 文学部・天ヶ瀬正博

たくさん授業をとるのは学生が将来に対する不安を抱えているからだろうと思います。大学全体が、将来について「こうしたい」というビジョンをもって学生たちに語りかける必要があります。長期的な視点がないと、教養は資格ブームの中で潰れていくと思います。

■ 副学長・小路田泰直先生

資格教育は専門学校がやることであって、大学がやることではないという根本を踏まえて、大学の教育を考えるべきだと思います。

■ 附属中等教育学校・吉田隆先生

僕が考える教養教育は、ここでしかできないことをやっている研究者が、それを1回生にきちんと伝えることです。最先端の研究者が語れば、皆、興味をもって聞けるのではないかと思います。中等教育学校でも、アカデミックガイダンスが始まってから「奈良女に進学したい」という生徒が増えました。

西村——ありがとうございました。シリーズ3回ということで、夏休み前にもう一回予定しています。センターの教養教育改革試案をたたき台にして議論していただければと思います。

参加者からの感想

■ 生活環境学部・小倉裕範先生

教養教育の目的には2つあって、ひとつは学生の視野を拡げること、もうひとつは専門課程の基礎を学ばせること、だと思ふ。現在奈良女の教養課程でこれらの目的がどの程度達成されているのか、ぜひ教育システム研究開発センターで評価してもらえたらと思う。私が普段食物栄養学科の学生を見ていて感じるのは、教養課程でもっとアカデミズムに触れてきてほしいということと、専門課程の基礎になる事柄（自然科学全般と統計学）をしっかり学習してきてほしいということである。

■ 理学部・酒井敦先生

学科ごとに異なる科目履修状況、専門以外の知識の「学び直し」の機会の必要性、適切な目標が設定されれば熱心に取り組む本学学生の特性、そしてすでにかなり過密な受講スケジュール。こうした現状認識に立ち、学生の多様なニーズに合った「学び」の機会を広く提供するためには一体どうしたらよいのだろうか。提案されていた、基礎的専門科目の相互開放も確かに有効であろう。一方、過密な時間割を考慮すれば、休業期間中あるいは土曜日を利用して共通教育科目を集中開講することも検討すべきではないか。様々なことを考えさせられた2時間だった。

■ 文学部・吉村あき子

今回フォーラムに参加して、専門・教養とも要卒単位数をはるかに超えて履修する、奈良女学生の真面目さを再認識すると共に、それが何を意味するのか考えさせられた。現在、複雑化する社会に対応してか、教養教育が意図する学生像が、中々見えにくい印象を持ってしまう。今回のフォーラムでは、結論はまだ見えないが、各学部の状況を知り、広い視点から考えるいい機会になった。

■ 附属中等教育学校・鮫島京一

棚瀬報告に刺激されて考えたことを二つ述べる。①人間形成としての教養教育。このことは、中等教育段階の課題が、学ぶ意味や意欲を自ら創り出す力の自覚を促すことにあることを教える。教養教育のあり方を問うことは高大接続問題を考えることでもあるのだ。②「学び直し」。このことは、学生の学び直しに留まらず、現場の教師の学び直しにも目を向けさせる。教師の再教育の場としての教養教育である。今後の議論の深まりが楽しみである。

■ 附属図書館・寺島陽子

奈良女子大学の学生は、とてもまじめで、とても忙しいということがよくわかりました。先生方からは、忙しすぎるのもっと余裕をという意見が多かったようですが、若くて元気なうちにいろんな資格をとっておくのは良いことと、私個人は思います。特に女性が仕事を続けるには、資格や学歴は必要だと思います。教養教育については、図書館では図書資料等の充実や、ラーニングコモンズなどの場を提供することで協力したいと思います。

全学フォーラム第3回のお知らせ

奈良女子大学における 教養教育の再構築のために

第3回 やるべきこと/できること
——改革案の可能性——

日時：2013年7月31日（水）

16時30分～18時30分

場所：F棟5階人間文化研究科大会議室（F506）

今回は多くの方に改革案に対する短いコメントをいただくところから始め、全体でのフリートークを中心に進めます。

表1 学科(コース)別科目群別平均履修単位数

主題	外国語 (日本語を含む)	保健体育	情報処理	教養科目群*1	専門科目	教職	その他 (要卒外)*2	総計	要卒計	
	(18)									
日ア	8.9	21.3 (16)	2.6 (2)	2.5	21.0 (12)	100.4 (60)	25.9	6.5	189.1	156.8
教育	8.4	17.5 (16)	2.4 (2)	2.2	16.2 (12)	105.5 (60)	30.5	2.5	185.2	152.2
数学	11.4	9.7 (8)	2.9 (2)	3.2	30.3 (12)	88.1 (60)	27.3	4.9	177.9	145.6
化学	7.3	8.6 (8)	2.5 (2)	2.9	15.0 (12)	110.4 (77)	12.5	0.2	159.5	146.8
食物	6.0	12.3 (12)	2.1 (2)	2.0	9.8 (12)	127.9 (74)	16.3	3.8	180.1	160.1
生活文化	8.1	13.4 (12)	2.2 (2)	2.8	25.5 (16)	85.7 (68)	14.5	2.5	154.9	137.8

※()内は要卒単位数

*1 食物の教養科目群不足者は基礎科目群および「現代社会と職業」から充当

*2 放送大学・キャリアプラン・資格関連

表2 履修の典型例(文学部言語文化学科日本アジア言語文化学コース)

1回生	2回生	3回生	4回生								
日本国憲法(B) 部落史と部落問題 女性と社会 一般基礎英語(3) 一般基礎英語(15) 実践基礎英語(12) 実践基礎英語(25) 中国語 I (E) 中国語 I (F) 中国語 I (G) 中国語 I (H) 中国語 II (E) 中国語 II (F) 中国語 II (G) 中国語 II (H) 中国語検定初級 I 中国語検定初級 II 健康運動実習 I (D) 健康運動実習 II (D) 情報処理入門 I (K) ことばと文化 日本の美と芸術 文化と民族 社会学入門 教職論(A) 基礎演習E 学ぶことと女性のライフスタイル 日本史概論A 日本美術史概論 日本アジア言語文化学入門A 国語学概論 I 国語学概論 II 日本言語文化学概論A	生活と健康 エクステンシブ・リーディング(英語)(8) エクステンシブ・リーディング(英語)(16) 韓国語初級 I (A) 韓国語初級 II (B) 心の科学への招待 教育原理(A) 教育制度論(A) 教育心理学(A) 教育課程論(A) 特別活動論(A) 教育方法の理論と実践 中等教科教育法国語A 中等国語科教材内容論A 生徒指導・進路指導論(A) 教育相談(A) 総合演習(B)【言語と文化】 文化人類学概論 国語史概論 I 国語史概論 II 中国語学概論 I 中国語学概論 II ジェンダー言語文化学特殊研究B 上代国文学特殊研究 II 中古中世国文学特殊研究 I 中古中世国文学特殊研究 II 近代国文学特殊研究 II 国語学講読 I 国語学講読 II 上代国文学講読 I 上代国文学講読 II 中古中世国文学講読 II 中世近世国文学講読 II 近代国文学講読 I 近代国文学講読 II 音楽表現演習	いのちと健康 生活と健康 日本の言語と文学 日本の文学を読む(展) ことばのしくみ 西洋の言語と文化 西洋の美と芸術 音楽概説 教育原理(A) 日本アジア言語文化学入門B ジェンダー言語文化学特殊研究B 国語学特殊研究 I 中古中世国文学特殊研究 I 中世近世国文学特殊研究 I 言語文化情報処理論 近代国文学講読 II 近代国文学演習 近代国文学演習	教育実習 I (中・高校) 事前・事後指導(中・高校) 国語学特殊研究 II 中世近世国文学特殊研究 II 近代国文学特殊研究 II 中世近世国文学講読 II 近代国文学講読 II 近代国文学演習 日本アジア言語文化学卒業論文演習 I 日本アジア言語文化学卒業論文演習 II 卒業論文								
<h2>凡例</h2> <p>科目群表示</p> <table border="1"> <tr> <td style="background-color: #f4a460;">外国語科目</td> <td>基礎科目群(外国語を除く)</td> <td style="background-color: #4CAF50;">教養科目群</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #9575CD;">教職科目群</td> <td>キャリアプラン・資格関連科目群</td> <td style="background-color: #2196F3;">専門科目</td> </tr> </table> <p>必修・選択必修表示</p> <table border="1"> <tr> <td style="background-color: #F44336;">必修</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #9C27B0;">選択必修</td> </tr> </table>				外国語科目	基礎科目群(外国語を除く)	教養科目群	教職科目群	キャリアプラン・資格関連科目群	専門科目	必修	選択必修
外国語科目	基礎科目群(外国語を除く)	教養科目群									
教職科目群	キャリアプラン・資格関連科目群	専門科目									
必修											
選択必修											

表3 履修の典型例(理学部化学科)

1回生	2回生	3回生	4回生
日本国憲法(A) 一般基礎英語(7) 一般基礎英語(19) 実践基礎英語(4) 実践基礎英語(17) 健康運動実習Ⅰ(H) 健康運動実習Ⅱ(H) 情報処理入門Ⅰ(K) 情報処理入門Ⅱ(C) 現代の倫理 心の科学への招待 化学の世界 教職論(B) 微分積分学概論ⅠB 微分積分学概論ⅡB 線型代数学概論ⅠB 線型代数学概論ⅡB 基礎の物理 生物科学2 地球科学概説2 基礎化学1 基礎化学2 化学のための物理1 化学のための物理2 基礎有機化学 化学実験法 化学基礎実験1	部落史と部落問題 いのちと健康 生活と健康 エクステンシブ・リーディング(英語)(1) エクステンシブ・リーディング(英語)(9) オラルコミュニケーション(英語)(6) フランス語ⅠA(5) フランス語ⅠA(8) スポーツ実習C6 健康・スポーツ科学 サイエンス・オープンラボⅠ 無機化学通論Ⅰ 無機化学通論Ⅱ 有機化学1 有機化学2 構造有機化学 物理化学通論Ⅰ 物理化学通論Ⅱ 化学熱力学 遷移元素の化学 化学基礎実験2 化学基礎実験3 量子化学 機器分析法1 化学キャリアセミナーⅠ	西洋の美と芸術 ジェンダー生理学 サイエンス・オープンラボⅡ 有機化学3 有機化学4 化学熱力学 化学専門実験1 化学専門実験2 化学専門実験3 化学英語 電解質溶液化学 反応速度論 分析化学 錯体化学 固体化学 機能性錯体化学 生体物質化学 高分子化学 化学統計力学 機器分析法2 物理化学演習 化学特別講義 化学キャリアセミナーⅡ	機能性錯体化学 有機反応論 化学セミナー3 化学セミナー4 卒業研究3 卒業研究4

凡例

科目群表示

外国語科目	基礎科目群(外国語を除く)	教養科目群
教職科目群	キャリアプラン・資格関連科目群	専門科目

必修・選択必修表示

必修
選択必修

表4 履修の典型例(生活環境学部食物栄養学科)

1回生	2回生	3回生	4回生
日本国憲法(B)	エクステンブ・リーディング(英語)(3)	栄養教育実習	エクステンブ・リーディング(英語)(11)
いのちと健康	オラルコミュニケーション(英語)(8)	事前・事後指導(栄養教育実習)	オラルコミュニケーション(英語)(19)
奈良のくらしと文化	教育原理(A)	分子病態学●	総合演習(J)【食物と環境】
一般基礎英語(9)	教育制度論(C)	病態生理・生化学実験●■	栄養学総合演習●
一般基礎英語(21)	教育心理学(B)	食品加工学実習■	卒業研究Ⅰ
実践基礎英語(6)	教育課程論(A)	食品化学実験●■	卒業研究Ⅱ
実践基礎英語(19)	特別活動論(A)	食品微生物学実験●■	
ドイツ語ⅠA(13)	教育方法の理論と実践	食安全性学実験●■	
ドイツ語ⅠA(14)	生徒指導・進路指導論(A)	応用栄養学Ⅱ●	
ドイツ語ⅠB(13)	教育相談(B)	応用栄養学実習●	
ドイツ語ⅠB(14)	病態内科学●■	栄養教育論Ⅲ●	
健康運動実習Ⅰ(K)	微生物学●■	栄養教育論実習●	
健康運動実習Ⅱ(K)	細胞生理学●■	臨床栄養学総論●	
情報処理入門Ⅰ(H)	食品化学総論●■	臨床栄養学Ⅰ●	
西洋の言語と文化	食品化学各論●■	臨床栄養学Ⅱ●	
現代法概論	調理科学●	臨床栄養学Ⅲ●	
生活の中の物理学	食品微生物学●■	臨床栄養学実習●	
健康・スポーツ科学	食安全性学●■	給食経営管理学Ⅰ●	
キャリアデザイン・セミナーB(11)	食品衛生学●■	給食経営管理学Ⅱ●	
教職論(A)	栄養生化学●■	給食経営管理学実習●	
生活環境学原論	基礎栄養学実験●■	臨床栄養学臨地実習●	
食物科学概論■	応用栄養生理学●■	公衆栄養学臨地実習●	
調理学実習(D)●	応用栄養学Ⅰ●	給食経営管理学臨地実習●	
応用調理学実習(D)●	栄養教育論Ⅰ●	食品貯蔵学■	
住環境学概論	栄養教育論Ⅱ●	基礎栄養学特別講義Ⅱ	
環境と健康●	公衆栄養学Ⅰ●	食物栄養学研究法	
公衆衛生学●■	公衆栄養学Ⅱ●		
生活福祉論●	公衆栄養学実習●		
食糧経済学●	食品生物工学■		
医学概論●■	食品加工学■		
生化学Ⅰ●■	基礎栄養学特別講義Ⅰ		
生化学Ⅱ●■	栄養教諭論		
有機化学Ⅰ■	食に関する指導論		
有機化学Ⅱ■			
基礎化学演習■			

凡例

科目群表示

外国語科目	基礎科目群(外国語を除く)	教養科目群
教職科目群	キャリアプラン・資格関連科目群	専門科目

必修・選択必修表示

- 必修
- 選択必修
- 管理栄養士必修
- 食品衛生管理者養成課程及び食品衛生監視員養成課程
必修または選択必修